HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	長野県下栗地区における山村生活誌 : 昭和20年代の農耕を中心に
Author(s)	野中, 健一
Citation	北海道大學文學部紀要, 41(2), 1-32
Issue Date	1992-10-27
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/33603
Type	bulletin (article)
File Information	41(2)_PL1-32.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北大文学部紀要 41-2 (1992)

長野県下栗地区における山村生活誌

── 昭和20年代の農耕を中心に ──

文学部助手（基礎文化論） 野　中　健　一

Upland Village Livelihood in Shimoguri, Nagano Prefecture

Ken'ichi NONAKA

I．はじめに

1）問題の所在

山村についてはこれまでに多くの研究が多方面からなされ，また貴重なモノグラフも数多く蓄積されてきた[1]。そして，日本の文化を稲作中心で捉えるという従来の見方に代わって，畑作からも捉えられるという可能性や，照葉樹林文化論やブナ帯（ナラ帯）文化論という生態を軸にした枠組みで捉える重要性が述べられ，成果が上げられてきた。その諸研究によって，山村が自然の生態系に組み込まれた土地であることを特徴づけるものは，1）中核となる生業がない，2）生活空間に特色ある環境構造が認められる，3）住民は精緻な自然認知を行っている，の3点にまとめられる[2]。このような特色は優れた独自の文化体系として認められ，山村を再評価する議論が高まっている[3]。

しかしながら，現実にみられる山村の多くは，高度経済成長の中で日本の経済的発展から取り残されて過疎となり，山村の伝統的生活が廃れていく中で，折しも再評価されつつあった独自の生活基盤や社会的機能が失われてきている。残された数少ない山村も，ほとんどは高齢者のみが残る残存的な姿をとどめているに過ぎないともいえる。

ところで，筆者の関心は，人間が自然と有機的に関わってきたことに

よって，どんな価値観が得られてきたかを解明するところにある。すなわち，いかに住民が自然と対峙する機会を持ち，それに対してどういう関わり方を行うか，そして，そのための適応技術や，それを生み出す契機，こうした関わりにおける自然を見る目，といったものが形成される条件を明らかにすることである。そのためには，土地に生活する者が消えてしまっては二度と明らかにできない，人々の日々の活動や自然を利用する技術，知識，自然に対する心意というものを聴き留めておく必要があろう。自然との伝統的な関わり方が，近代化の流れの中で，変容したもの，あるいは存続してきたもの，その中にみられる同じ自然であっても食い違う自然観の断層を明らかにすることによって，現代問われている自然と人間との関係を考える示順になるとも考えられる。

山村では，自然と密接に関わって生活が営まれてきた。その姿は，農耕などの日常的な生活空間における生業，生活における衣食住のあり方にあらわれる。それを山村空間と有機的に結び付けていく作業によって，自然との結び付きを理解できると考えられる。

筆者は山村の生活において，さまざまな資源をいかにして選択し，それを得て，またどのように価値づけているかを糸口のひとつとして見ている。そこで本稿では，山村に暮らしてきた人々の自給的食料をめぐっての生活誌を作成することを目的とした。具体的には，まず対象地域の一山村の概要を述べて地区の生活構造を捉え，日常生活の中心となる農耕を中心に様々な資源がどのようにして利用されるのか，場所と作物および農耕活動から検討していきたい。対象時期は，昭和25年前後を中心とする昭和20年代を設定した。山村は，明治以降の商品経済流入によって，自給的な社会から変化してきた面が諸研究によって認められている。しかしながら昭和20年代には，焼畑をはじめとして畑作を主とする生業において従来からの形態や技術が継承され，社会・経済的な面においても高度経済成長期の急激な変貌にみまわれる前であり，伝統的な文化がまだ生活全般に現れていた時期であったといえる。また，こうした山村生活が聴き取り調査で得られる最後の時期でもある。そこで，この時期

を生活誌を考える上での基本とし，その当時の状況を把握する。そのために，当時と同様に行われている様式はできる限り実見して参考にし，援用した。

2）対象地域に関する従来の研究

フィールドとして調査を進めてきた長野県下伊那郡上村下栗は，他の山村同様に，過疎化を与儀なくされたが，現在でも雑穀栽培に代表される畑作を中心とした生業をはじめ，生活全般にわたって伝統的な姿を色濃く残している。次章で述べるように，交通の便がきわめて悪く隔絶されており，自給的農業が続けられてきた。その姿は，日本の山村で営まれてきた文化や生活体系を知る上できわめて貴重である。また，数多いモノグラフの中でも，積雪の少ない中部地方太平洋側の事例は少ない。そのため，本地域を調査地とすることで，日本各地の山村との比較研究の資料とすることもできる。

この地域はかつて全国の山村を民俗調査をしつつ歩いてきた宮本常一が驚いたほどの隔絶された山村である[4]。その後も本地域ではきわめて伝統的な生活が営まれてきたことは，市川（1991）らによって述べられている[5]。古くは信濃教育会下伊那部会（1936）によって詳細な地誌がまとめられ，昭和初期の集落や耕作の状況が把握できる。その後も上村民俗史刊行会（1977）によって聴き取り調査を中心とした方法によって，麦栽培をはじめとして生業全般にわたる民俗知識がまとめられており，充実した記録資料が得られる。さらに，筒井（1974）が，1936年の地誌調査時点からの集落の変貌を述べ，平沢（1988）は狩猟活動について報告している。また，野本（1987）は，民俗学の立場から，下栗地区の調査結果を数多く用いて生態民俗の比較検討を行っている。八田（1988）は，伝統的栽培品種について現在の栽培場所と利用方法を克明に調べ，さらに八田（1989）は，本地域の特徴である山地急斜面の空間認識の特徴を明らかにしている。このような先行研究によって，集落の状況や生業形態の技術的側面や作物の特徴が明らかにされている[6]。

3）調 査 方 法

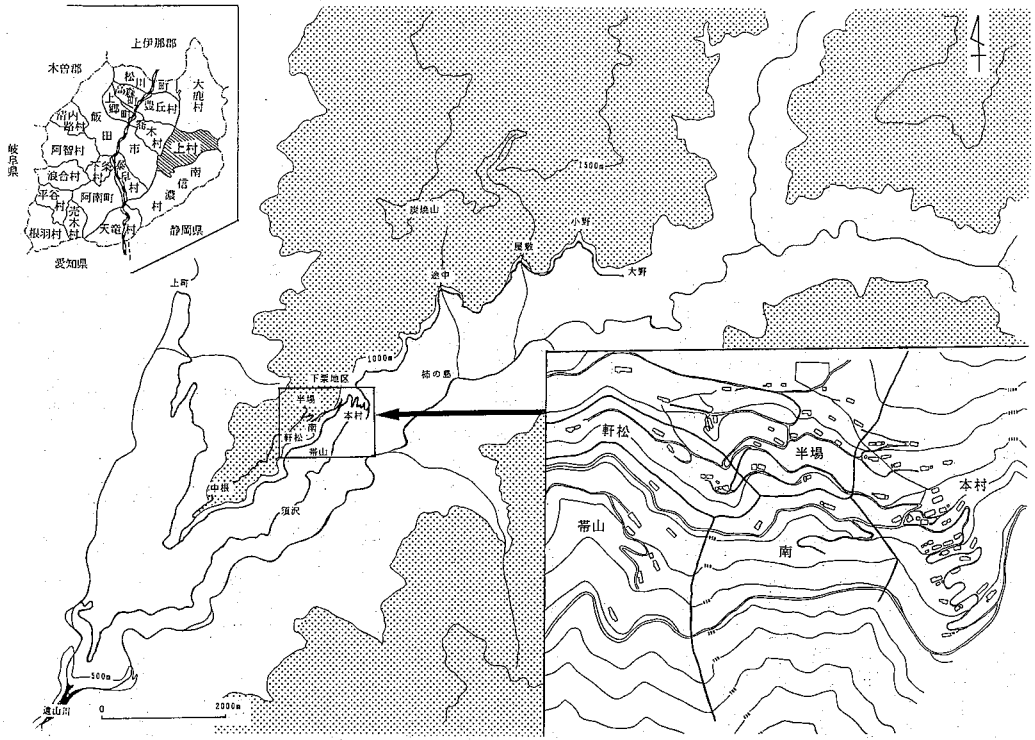
調査にあたっては，以上の文献に加えて，上村および南信濃村の行政統計資料を用いて地区の概況を把握した。また，1988年10月より1992年2月まで，季節毎の生活の違いが分かるように断続的に現地へ出かけてフィールド調査を行って様々な作業を実見した。それと同時に，各集落で数名ずつの住民より，聞き取れる限り古い時期から現在までの，生業活動や利用資源・技術を中心とした生活状況について詳細に聴き取りを行なうという方法をとった[7]。

II．下栗地区の概要

1．位　　置

下栗地区は，第1図にみるように長野県下伊那郡上村にあり，隣接する南信濃村と併せて遠山郷と呼ばれている地域の一地区である。遠山郷は，中央構造線が貫通する谷（遠山谷）に開けた中心集落と谷周辺の山地に散在する集落群からなっている。遠山谷は，秋葉街道（現在は国道152号）が通り，かつては参詣の往来でにぎわったところである。しかし，現在でも国道は峠部分が未開通であり，山に隔てられた隔絶山村として名高い。上村の中心，上町から伊那地方の中核都市である飯田までは，直線にして約20 kmの距離に過ぎないものの，標高1,500 mを超える伊那山地によって隔てられており，自動車で往来できるようになったのは，1968年に赤石林道が開通してからのことである。それまでは，上町より徒歩で峠を越えるか，あるいは，遠山川沿いに平岡まで一旦下ってから天竜川沿いに北上しなければならなかった。

本稿で取り上げる下栗地区は，上村の中心上町から4 kmほど離れており，遠山谷に流れる本谷川によって刻まれたV字谷の斜面に立地する。そこは，「天に近い村」とも形容されるように[8]，本谷川の谷底の標高550 mに対して，集落は標高800〜1,100 mに位置し，南アルプスの聖岳（3,011 m）や光岳（2,591 m）を目前に見るところである（写真1）。本地区の由来は，大井川上流から赤石山脈を越えて移住した狩猟集団集


上伊那郡
木曽郡
松川町
大鹿村
高森町
豊丘村
飯田市
阿智村
上村
南信濃村
下条村
泰阜村
阿南町
平谷村
売木村
根羽村
天竜村
岐阜県
愛知県
静岡県
上町
1300m
炭焼山
小野
尾張
大野
途中
1000m
柿の島
下栗地区
半場
南
本村
軒松
帯山
中根
須沢
100m
遠山沼
0
2000m
軒松
半場
本村
帯山
南

第１図　対象地区

落に起因し，はじめは大野に定住し，人口増加とともに西に延びて行き，室町時代に本村や半場の集落が作られた。食用源となる栗林が多いために定住に適しており，集落規模も大きくなったのだと伝えられている。また，近世初期になって遠山氏に臣従し，遠山郷の中心である上町や和田と交流ができるようになったとも伝えられている[9]。昭和初期における下栗地区の状況を『遠山の地誌』の中にみても，遠山地方はもとよりさらに下栗地区は不便で孤立的であったことが記されている。こうしたことから独自の生活体系が育まれてきたと考えられる[10]。

ほとんどの世帯が畑作を主体とした農業を基本的な生業とし，農閑期には林業に従事するなどの山村特有の複合的な生業が営まれてきた。そういった生業を考える上で重要な自然環境を次にみてみよう。

2．自　　然

下栗地区が立地する山腹斜面は谷に対して平均45度にもなる傾斜である。集落はややなだらかな緩斜面上にあることがわかるが，個々の集落の平均斜度は第1表に示すように，20度を超えており急斜面にはかわりない。また，山地の地すべり地でもあり，近年でも集落内に崩落が発生したことがある[11]。地質は，母岩が古生層の石灰岩および粘板岩で，土壌は岩屑土であるものの，砕き易く石灰分に富んだ中性の土質なため，傾斜地の中では耕起が比較的容易で，作物栽培に適した土地ともいえる[12]。集落周辺の植生は，夏緑広葉樹林帯で，ナラ，ケヤキ，クリ，シナノキ等が主要樹種である。集落は東西方向の南斜面に位置しているために日照時間が大変長い上に日陰になりにくく，さらに輻射熱の効果も高い。

第1表　集落の平均傾斜度

集　落	傾斜度
帯　山	35
南	32
軒　松	30
本　村	22
半　場	17

気温・降水量および天候から気候の特性をみてみよう[13]。

気温は，夏の最高気温は30°Cを超える一

方で，冬には最低気温が－10°C以下にまで下がる。夏は湿度が低く爽やかな陽気であるが冬は冷え込みが厳しい。第2図にみるように，4月になると気温は上昇し，4月中旬には平均気温は10°Cを超え，5月には12°Cに達し，7，8月には20°C前後が続き，10°Cを超える日は11月中旬まで続く。

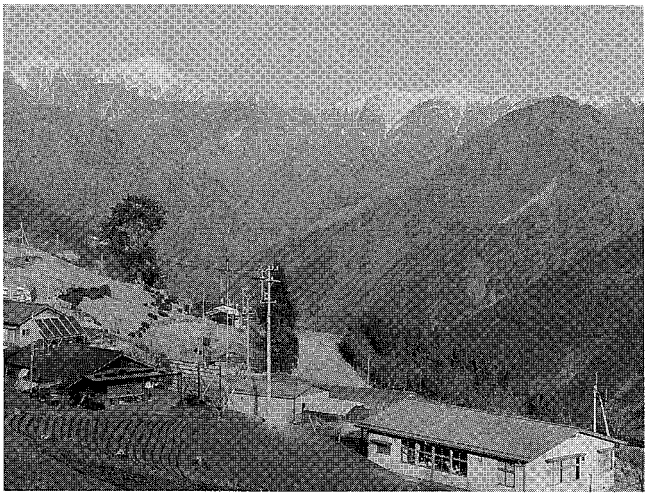
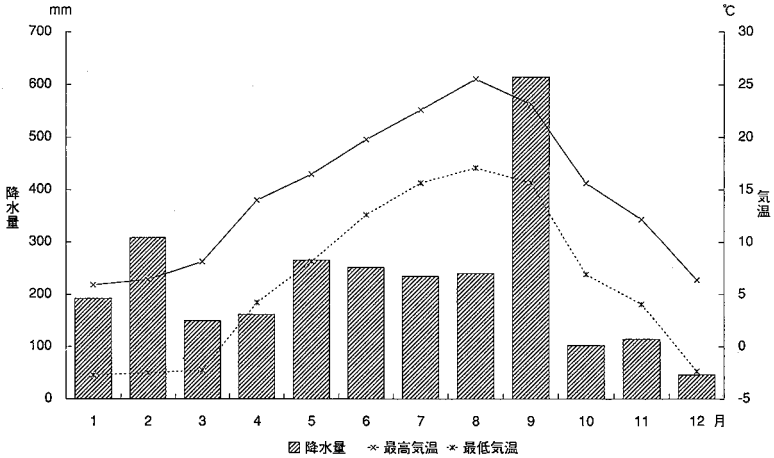


写真1　集落景観（1992年撮影）

このように作物の生育時期には温暖な気温が続く。霜期間は10月中旬



第2図　月別の平均気温および降水量（1989年）

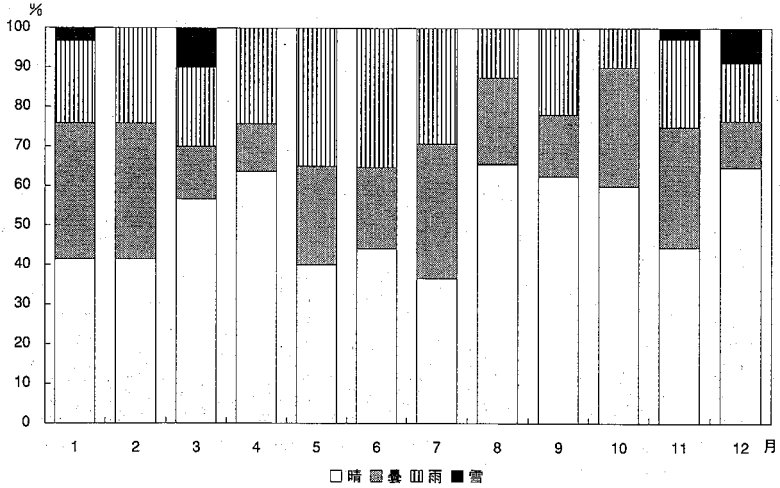
～5月初旬である。降水量は，1989年の年合計では2,646 mmとなっており，夏期の降水量が多い。雪は一度に30 cm程積ることがあるが数日で溶けてしまうので根雪にはならない。天候の月ごとの比率を第3図にみてみると，5～7月には降水日が多いものの，年間を通じて降水日は少なく，晴天率は1989年で51.2%である。とりわけ8月から10月には晴天が続き，また，冬期も晴天が多く降水は少ない。ただし，秋の台風シーズンには，大量の雨がもたらされることもある。このように東海気候区に属する太平洋側の内陸性気候といえる。

3．伝統的時期の生活

第1図にみたように，下栗地区は，大きくは9つの集落から成り立っている。その中で，本村集落は最も世帯数と人口が多く，中心的な集落である。現在では行政的には9集落のまとまりを下栗地区と指すが，とくに本村集落を中心にして帯山・南・軒松・半場の5集落がまとまっている地区が下栗と呼ばれる。中根，屋敷，小野，大野は別地区に扱われる場合が多い。さきに述べたように，下栗には，標高の高いところから低いところに向けて3箇所の井戸があるのみで，その井戸を中心に，上下左右に次第に住居が作られたところである[14)]。したがって井戸から離れた家になるほど距離に加えて高低差も大きくなるので水汲みは厳しい仕事であった。そのため，水は貴重であり，食事に使う水以外は，降雨時に屋根を伝う雨水を受けて風呂や洗濯に用いるという状況であった。1955（昭和30）年になって，地区内の有志によって集落上部の沢から水をひいて各戸に水道を設け，水の不便は解消された。

地区の世帯数は1950（昭和25）年には9集落全体で130戸，人口705人を数え最盛期を呈していた。当時の家族数は，聴き取り調査によると，数少ない分家世帯の2人から12人の大家族まであり，平均で7人ほどであった。分家はまれで，最上部に家を構えた2軒のみである。次男以下は，地区外へ転出していた。

ほとんどの世帯は農業に従事し，かつ，農閑期には林業にも従事する



第3図　月別の天気（1989年）

という生業形態が一般的であった。その他の職業への従事は第2表にみるように，自家の森林経営，冬期の狩猟あるいは炭焼といったものが多い。このように専ら山の資源に依拠する職が成立して活発に営まれていた時期であった。

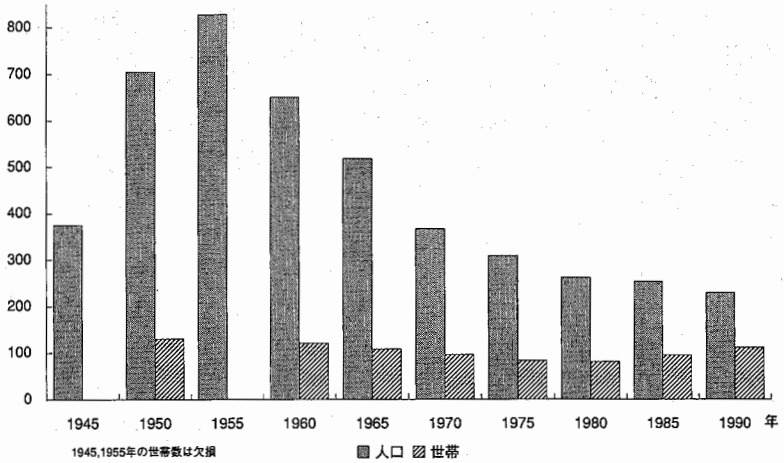
第2表　世帯別兼業職業従事（5集落の合計）

職　　業	世　帯　数
林業(自家)	23
狩　　猟	5
炭　　焼	10
博　　労	1
公　務　員	2

注）　農業および林業雇用は除く
資料）　聴き取り調査

農業は，畑作が中心であり，自給用の食用作物は全て得られていた上に，オオムギ・コンニャク・ダイズ・コウゾ等の作物，および蚕が生産出荷されていた。商品化は，昭和25年を過ぎた頃から上村農協が積極的になり，多くの種類の作物が少量でも売れるようになったといわれる。

林業では，山林地主による雇用と営林署の下請け仕事に加えて，桶などに用いるサワラの伐採も行われて現金収入源となっていた。炭焼につ



第4図　人口および世帯数の変化

いては，『遠山の地誌』によると，集落周辺には適当な森林がなく，自家用さえ乏しかったと述べられている。聴き取り調査によっても、本谷川沿いに1944年から1956年にかけて森林軌道が敷設されたことにより，搬出の便が良くなったことや，営林署向けに需要ができたために，炭焼が行えるようになったといわれる。したがって，炭焼は，この時期においては誰もが行う生業ではなく，山師として従事しない人を中心に活発になった新しい仕事であったといえる。

このような経済活動の中で最も多く現金収入を得ていたのは山師や猟師であった[15]。しかし，その現金収入によって得られる商品は地区内では少なかった。本地区には雑貨店1軒のみで，大半の品物は上町や和田の行商によって運搬されて来るものであった。特に食料品は種類が少なく，鮮度も悪く，魚介類は貧弱であり，大半の食料は自給されていた。

次に，この時期以降の変遷に触れておきたい。第4図に示したように人口および世帯数は減少していった。それは林業の不振などによって愛知県方面への開拓振興がなされて離村が進んだことによる。とりわけ1961（昭和36）年の大雨の被害を受けて，離村する世帯が相次いだ[16]。

地区の住民によって共有されていた245haの山は，1972(昭和47)年に，生産森林組合を結成して組合所有へと変更された。

本地区は，自動車が通れる道路の開通がきわめて遅く，それがこの地区の隔絶性をもよおしていたともいえる。開通以前は上村の中心地まで4kmほどあり，人1人がやっと通れるほどの山道を1時間以上もかけて徒歩で往来しなければならなかった。なかには，その細く険しい道をカブで往来していた人もいるが，危険を伴っていた。このように荷物の運搬等には大変な不便を強いられていたのである。昭和40年に入って，村の者たちが総出で，上町から通じる道を拡張建設していったが，広域基幹林道赤石線として下栗地区の中心である本村集落まで開通したのは昭和40年代後半になってからのことであった。半場集落に1980（昭和55）年，最奥の大野集落には1985（昭和60）年になってようやく到達した。

本地区は，1952（昭和27）年に急傾斜地帯農業振興地域に指定され，さらに数度の農業振興策によって，肉牛の飼養，こんにゃく，茶栽培が主要生産品となったものの，過疎化・高齢化が進み，1992（平成4）年現在では77戸まで減少し，9集落の下栗地区全体の総人口は209人(男99，女110)となっている。第5図に示した下栗地区の年齢構成をみてわかるように高齢社会を呈している。近年は全国的に伝統的な作物が見直され，また，山村の自然に触れ合う暮しがもてはやされる傾向にある。下栗地区では昔ながらの雑穀栽培が行われていることや，味の良い野菜が作られているとの評判で人気を呼び，都市住民との間で契約栽培も行なわれるようになった。1980(昭和55)年に閉校した小学校は村営のロッジとして運営され，自然に接する生活を味わう観光地としての整備も行なわれている。

Ⅲ．農耕の空間的展開とその特徴

1．耕　　地

本地区は，平坦地は家の敷地と道幅のみで，他はどこも急斜面という

第3表　畑の区分

	常　　畑	山　作　畑	
		通い畑	焼　畑
場　所	住居周辺	山	山
面　積	3.2反	2.6反	3.7反
作　物	麦 雑穀 野菜 果物	クワ 麦	雑穀 マメ

注）　面積は，21世帯の平均
資料）　聴き取り調査，信濃教育会（1936）

土地である。農業は，畑作が大部分を占め，稲作はきわめて僅かに行われているのみであった[17]。地区内のどこの畑も斜面に立地していることが大きな特徴であり（写真2），斜度が30～45度にもなるところまで耕地が作られていた。斜面を削ってテラス状にした耕地は作られていない。

まず，畑が地区のどこに作られてきたのかをみていきたい。昭和20年代においては，耕地の場所は第3表に示すように大きく3箇所に分かれ，1）自宅周辺の常畑，2）山地に作る焼畑，3）山地に作られた常畑である山作通い畑，に区分されていた。

1）の常畑は家の周辺に作られている畑で，家の下側に，最大の家で5反ほど，平均で3～4反ほどの面積で作られている。ここでは，秋播きのオオムギを主体として，夏期に他の雑穀やほとんどの野菜

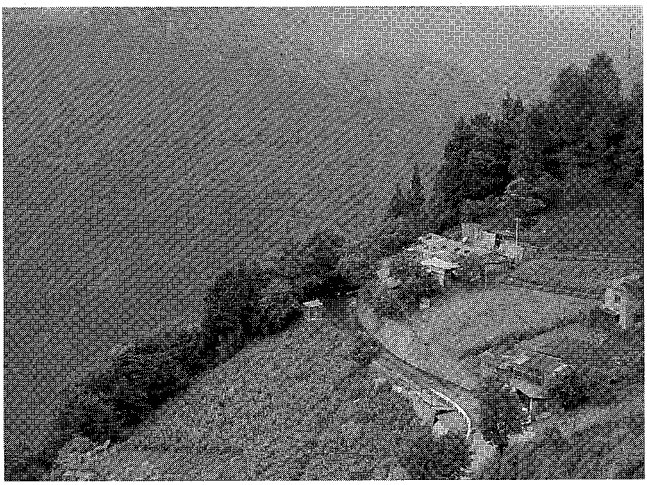


写真2　畑の立地（1990年撮影）

などの自給食用作物，および工芸作物であるクワやコウゾが栽培された。

次に，2）の焼畑は，集落の周辺はもとより上部や下部のいたるところで行われた。本地区ではいわゆる「切替畑」が多く，山林を焼いて，畑として3年くらい作物を作った後に，スギやヒノキを植林する形態である。昭和20年代を最後に，新しい焼畑は作られなくなり，その時に植林された木が成長して現在に至っている。多くの住民は，地区内にある数軒の「山持ち」と呼ばれる山林所有者から山地を借り受けて焼畑耕作を行った。そうすることによって整地ができる。その焼畑跡に苗木を植えて返却するという方式であった。あるいは，山林地主への年間数日の労働提供を代償に，空いている山地を借り受けて焼畑を行い，その後は放置する場合もみられた。規模は大きい家で10反ほどで，3〜4反が通例であった。

そして，焼畑を行った結果，耕作に適した土地条件であることがわかった場合，その一部は耕作を続けて畑地とした。それが，3）の山作の通い畑である。2反から6反ほどの通い畑を所有し，クワや雑穀が作られていた。この通い畑は，常畑面積の少ない本村集落の住民が所有する場合が多かった。

以上の3箇所の畑を主として，他にも譲渡や貸借関係によって他人の常畑の中などに点々と数カ所の小さな畑を有していた。そのため，集落内の畑地の土地所有は複雑であり，狭い土地であっても小さく分割されて所有者が分かれている場合が多い。

2．耕地の特徴

斜度が30〜45度にも及ぶ山地斜面の耕作には，それに適応するためにいくつもの工夫がみられた。ひとつは，畝を等高線状に作っていくという横畝耕作である。これは，雨で土壌や作物が流れるのを防ぐ効果が大きいとされる。しかし，他の急傾斜地区にはこれとは逆に，斜面に沿って縦畝が作られている例もあり，こちらは流れた土を上げるに際して鍬などの農具を使い易くするためであるともいわれる。下栗地区周辺では，

隣接する南信濃村の木沢地区で縦畝耕作が行われている。斜面における畝方向の考察については，水はけをよくするため，あるいは，土上げの労力が縦畝の方が少なくて済む，あるいは狭い耕地を縦方向に畝を切ることによって広く感じる心理的効果等，複合的な条件によることが指摘されている[18]。したがって，横畝を作る下栗の場合は，それらの効果よりも土壌侵食の防止を重視しているといえる。耕土が雨によって流出するのを防ぐために，畑の下には，山から伐ってきた栗の木で土止めが作られている。また，土道（どみち）と呼ばれる小道が畑地を斜めに横切って稲妻状に作られており，これが降雨時の雨水を流す役割を担っている。

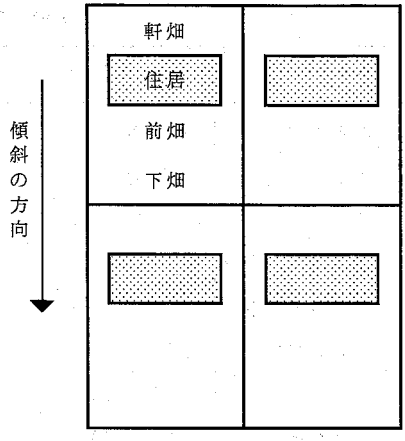
しかしながら，このような工夫が施されても，大雨が降ると，「アマンボレ」と呼ばれる，土がえぐらえたような溝ができて土は流出してしまうので，毎年のように母岩を砕きながら耕起して，耕土を作っていかなければならない。本地区は，さきに述べたように岩屑土であり，しかも一般には作付に不向きと言われる15度はゆうに越える急傾斜地で，石畑といわれるように土壌は貧弱である。しかし，古生層の母岩は比較的砕き易く，かつ，養分に富んでいるので耕土とすることが可能なのである。

畝作りの際には，畑の下から上に向かって，土ををすくい上げるように行う。収穫後も切株は残しておいて，裸地にならないようにすると同時に作業の足場ともしている。他にも，雨の後には欠かさず，畑を見回り，土寄せを行うなど，傾斜地に作物を作るための労働が欠かせない。作物の輪作も大きな効果があると考えられる。この点は後述したい。

こうした急傾斜地に対して，住民は「土は流れてしまっても，その分は上から流れて来る」と言い，土壌の流出には寛容である。また，施肥の際には，「畑の上に積んでおけば，自然に流れて畑に広がるので都合がよい」ともいう。

住居と常畑との関係をみると，第5図に示すように，家が構えられてその下側に常畑を広く所有するという様式が1戸の単位で，それが上から下にかけてつながっている。したがって，堆肥は住居の敷地内で作ると，それを家の前の畑に運搬するだけでよく，手間が省ける。

これを空間認識という視点からみてみよう。傾斜地に生活する住民の認識として，斜面を表す「サカ」と平坦地を表す「タイラ」の2項対立が認められる（八田，1989)。さらに，本村集落が半場集落からは「シタムラ」と指されるように集落内の諸空間関係が「ウエ」と「シタ」で言い表わされており，急傾斜地ならではの垂直的な空間構造が表れている。



信濃教育会下伊支部（1936）を加筆修正

第5図　住居と常畑の関係

Ⅳ．作物種類と栽培様式

1．作物種類

昭和20年代において作られていた作物の種類と主要作物の1世帯あたりの収穫高を，第4表および第5表に示した。幾種類もの雑穀が作られていた中で，とりわけオオムギ栽培の比重が高い。1960（昭和35）年頃まではオオムギが自給用はもとより出荷向けの作物として最も主要な作物であり，盛んに栽培されていた。オオムギは，しばらく耕作が続けられた土地でないと育たなかったといわれ[19]，栽培場所は，常畑を中心としていた。本地区で伝統的に作られていたオオムギは「下栗麦」と名付けられた在来品種で，収量は多いものの，霜や雨に弱く，雪に埋もれると腐ってしまう「雪腐れ」(病原菌による雪腐病)になりやすい欠点があった。したがって，下栗麦には日照の良好な畑が適地である。本村周辺は斜面の急な「サカバタ」であって，日照が良く，雪が積もらず霜もあまり降りない。そのため下栗麦に適しており多く栽培された。しかし半場集落のような上部に位置してやや平坦な畑地では，積雪しやすいため栽培困難であった。そこで，半場に分家して新居を構えた者が，昭和25年頃に新品種を栽培した結果，それは雪腐れにもならず，かつ，多くの収

第4表　栽培穀類

種　　類	用　　途		世帯収量	出　荷
オオムギ	粒　食	飼　料	80.0斗	○
コムギ	おやき 粉食	飼　料	9.2	
ソバ	そ　ば だんご	アク抜	12.0	
アワ		飼　料		
ウルチアワ	粒　食		6.0	
モチアワ	も　ち		6.8	
ヒエ	粒食　粉食	飼　料	5.2	
シコクビエ	だんご 粉食	飼　料	2.8	
コキビ	ぼたもち だんご	飼　料	8.8	
タカキビ	粒　食	飼　料	2.8	
トウモロコシ	粒　食	飼　料	—	

注）　平均収量は21軒の平均
資料）　聴き取り調査，上村（1977）『上村の民俗』

第5表　栽培果樹野菜

区　分	種　　類
マ メ 類	ダイズ* アズキ ササギ エンドウ
イ モ 類	ジャガイモ サツマイモ サトイモ コンニャク* ユリ*
根 菜 類	ダイコン ニンジン ゴボウ ニンニク* ラッキョウ
葉茎菜類	ハクサイ ネギ ノザワナ シャクシナ ゲンスケナ ミョウガ* エゴマ*
果 菜 類	カボチャ ナス キュウリ
そ の 他	シイタケ* 茶* 梅 クワ* コウゾ*

注）　＊印は出荷もされる
資料）　聴き取り調査，上村（1977）『上村の民俗』

穫が得られため新品種が普及した。

他の雑穀の収穫高はオオムギよりもかなり少なく，また，栽培面積も各種類で3〜5畝ほどであり，小規模な自給用栽培であった。その中ではソバが最も栽培面積の大きい作物である。ソバは，痩せた土地でもよく育ち，かつ，50〜70日の短期間に生育し，収穫できる。焼畑地では初年度の夏に木を焼いて整地した後，最初に撒くことのできる作物であった。そのため焼畑が主要栽培地となっていた。また，夏にイモや豆を収穫した後に，播種を行い秋に収穫できるので，常畑においても集約的土地利用ができるという利点があった。ソバには「ニドソバ」といわれる品種があり，多収量があげられていたといわれる[20]。アワはウルチ種とモチ種が作られた。このアワおよびコキビは，焼畑の2年目の作物として作られた。また，常畑においても，麦の後作として作られていた。コムギやヒエは，常畑において作られた。シコクビエは，道端に栽培していたといわれることから，これもまた少量の栽培であって，需要は決して高くなかったといえる。また，道端に植えられた理由として，シコクビエは他の雑穀より丈が短いため、成長して倒伏してもさほど邪魔ではなく，踏まれても丈夫であったこと，それと同時に土流れを防ぐためでもあったといわれる。タカキビは常畑よりも畑端など条件の悪いところに植えられた作物である。

反当りの収量でをみると，各雑穀とも現在の収穫量で4俵(240 kg)前後となっている[21]。したがって，平均的な雑穀の収量である150 kgと比べて相当高い収量が上げられる状況であったといえる。

また，本地区ではジャガイモが多く作付けされている。ジャガイモは，麦の後作とせず，専用の常畑に植えられる。ここのジャガイモは連作障害が起こらないといわれる。よそから移入した男爵イモは，次第に減収し4年目には育たなくなっていることから，在来種が連作障害に強い品種であることがわかる。しかし，収量は次第に衰えていくことが認められており，麦作を行わなくなった畑に場所を移して作付けしている。在来品種で「アカイモ」と呼ばれた品種は，6月に掘り取って収穫した後，種イモを植えれば10月にも再び収穫できるものであった。ただし，この

2度収穫できるアカイモは「エグイ」味がするので，次第に1度のみ収穫する在来品種へと変わっていった。ただし，このイモも，2度の収穫が可能であり，「ニドイモ」と呼ばれている。

マメ類では，ダイズやアズキが多く栽培されていた。ついでササギの栽培も多い。ダイズの場合，ヤマバトが新芽をついばむので，その食害を防ぐために自宅で苗に育てた後，麦の畝の間に植えていく。

多くの野菜種類の中で，周辺の地区と比べて多く栽培されるのは，ニンニクとラッキョウおよびユリである。また，エゴマが焼畑で栽培され，昭和20年代では商品作物にもなっていた。ナス，ホウレンソウ，ハクサイなどは明治以降になって作られ始めた作物である[22)]。

また，茶が自給用に栽培されているが，これは国内では最も標高の高い地区における栽培で，畑端に植えられていた。

商品作物として栽培されたものは，食用作物としてオオムギ，コンニャク，ダイズ，シイタケが主要であった。なかでも，コンニャクは，元来は自給程度であったものが明治末より出荷されるようになり[23)]，コメと同価格で取り引きされていたために，最も重要な作物であった。

商品作物の中で，工芸作物は明治以降の山村経済に貴重な現金収入をもたらすものであった。本地区においても養蚕はどこの家でも行われていた。カイコのエサに用いられるクワは，常畑の中では，麦畑の中や日当りが悪いためにオオムギ栽培に適さないところ，そして山作通い畑に多く植えられた。他に，畑の端にも植えられ，有効に土地が利用されて盛んに栽培されていた。

次いで，和紙の原料となるコウゾも盛んに栽培されていた。コウゾは永年性の木本であり，5月頃に新芽を出し成長し，葉を落として乾燥する1〜2月にかけて木を切り，その樹皮を剝いで干して蒸す，という作業が行われていた。常畑に植えられて，オオムギ，マメとの混作が行われた。

このように多くの山村と同様に，種々の雑穀とマメ・イモ類を基幹作物として，幾種類もの野菜が作られている。これら基幹作物を中心とし

第6表　主要作物の栽培場所

畑区分		作物
常畑	普通畑	ムギ ソバ ジャガイモ トウモロコシ
	地味悪畑	アワ ヒエ コキビ タカキビ クワ
山作畑	通い畑	クワ ムギ
	焼畑	アワ ソバ コキビ ダイズ アズキ エゴマ
道端・畑端		シコクビエ タカキビ ラッキョウ ネギ クワ

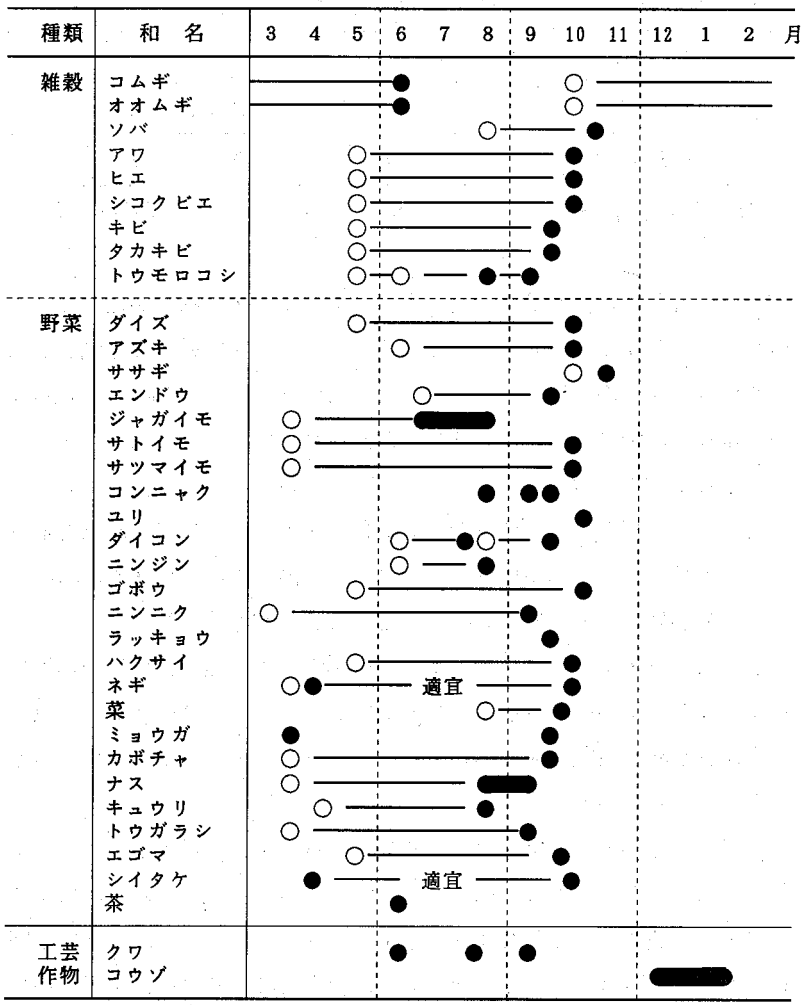
資料）聴き取り調査　　注　ムギはオオムギおよびコムギを指す

た栽培状況から，作物はその利用価値によって植える場所が選択されていたことがわかる。第6表にみるように，雑穀の中で最も商品価値が高いオオムギが土地条件が良く，しかも手入れの行き届く常畑に栽培され，他の雑穀は，地味の悪いところにも植えられている。これは，ヒエをはじめとして雑穀が痩せた土地でも育ち粗放に耐える強さを持っていたことと，かつ，限られた土地を効率的に利用するという態度の現れであろう。それに加えて，食用作物は食用に際しての調理加工の難易や嗜好などによる価値付けの差異にも関わっていることが考えられる。

さらに，茶・クワ・コウゾのような永年性の木本の植え付けが畑端に多く，また，畑の中にも植えられたていたことは，土地の有効利用以上に土流れを防ぐ役割が大きい。それは，シコクビエやラッキョウ，ネギにも同じことがいえる。

農耕に関連して，各世帯では堆厩肥を作るのを主な目的として，ウシあるいはヤギが飼育されていたことに触れておきたい。それは，ばくろうによって連れてこられた仔を1年半ほど預かり，生育させるという肥育でもあり，現金収入源ともなっていた。家畜のエサには，雑穀の殻や茎が用いられて，それを家畜小屋内に敷いて踏みつけさせて，厩肥が製造された。ヒエをはじめとして雑穀の稈やヌカは，良好な飼料として認められており[24]，栽培によって得られる残滓物が有効に利用され，飼育と

雑穀栽培とが結合していた。また，ニワトリも各家で，数羽ずつ飼育されていた。これも，採卵を目的とするだけでなく，厩肥を作るための飼育でもあった。



○播種・植え付け　●収穫

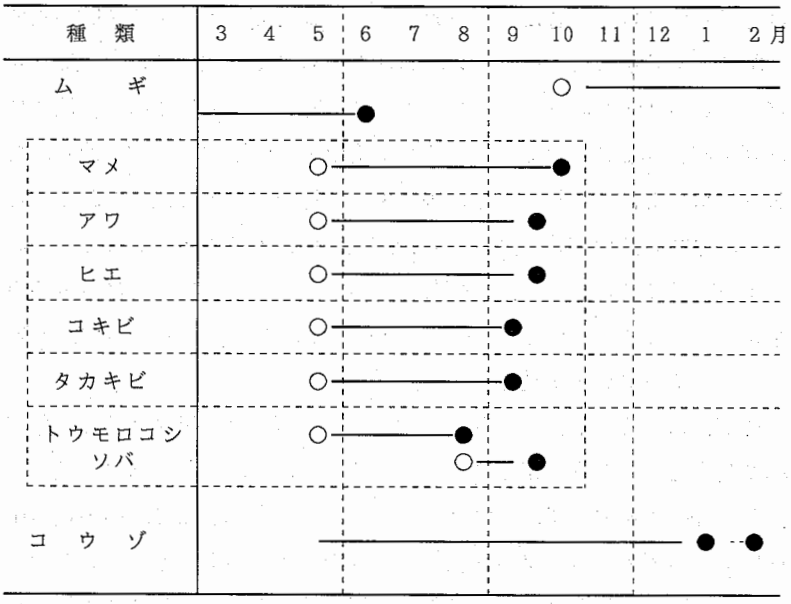
資料）聴き取り調査，上村民俗誌刊行会（1977）

第6図　栽培カレンダー

2．栽培時期と作付

次に作物の栽培時期をみていこう。主要作物の栽培期間を第6図に示した。雑穀・野菜とも春蒔きの種類が多いが，麦をはじめとして年間を通じて何らかの作物が常畑に作付けられている。そうなると，限られた畑の中で各作物がどのように作られているのか，によって効率的な収穫に影響が出る。一般に地力増進作物は，ダイズ，ソラマメなどマメ類である。ムギやジャガイモは地力維持作物であり，地力低下は余り起こらない。雑穀類のアワ，ヒエ，キビは地力掠奪作物である[25]。それは逆に吸肥力が強いことを表し，不良環境でもよく育つ由縁でもある。ただし，雑穀の連作の場合，減収するものの連作には充分耐え得る。こうした作物学的な条件を前提にして，本地区ではどのような連作形態になっていたか検討したい。

常畑における作物の組合せおよび輪作は第7図のようになっている。



資料）聴き取り調査，上村民俗誌刊行会（1977）

第7図　常畑における輪作

常畑では，基本的にはオオムギが毎年10月に播種されて一面に作られる。そして，6月から10月は他の作物の栽培期間となる。5月になると，麦畑の畝の間にマメや雑穀を植え付けていく。6月になると麦刈りを行い，9月になると雑穀の刈取りが始まる。そして10月下旬には麦の播種を行う。夏期の常畑では混作も行われており，成長時期がそれぞれ異なる作物を同じ畑地に植えて，狭い土地の集約化が図られている。さらにこうした作付によって，耕地が裸地となる時期がほとんどないため土壌流出を防ぐ結果ともなっている。基本的には麦作があるので，連作にはならないが，各雑穀の作付場所は，毎年換えて収量が落ちないように努められている。

輪作を続けていくと，常畑の地力低下が心配される。そこで，肥料の供給をみてみよう。下肥はもっぱら野菜に使われるが，オオムギの播種に向けての下ごしらえには，種と混ぜられている。牛肥は麦畑，鶏糞はカボチャなど，土に穴を開けて施肥する野菜に用いる，というように使い分けられている。また，ジャガイモは，畝を切って，イモを置いた間に肥料と堆肥をのせていくという方法が取られる。他の作物は，ほとんど，畑から作物を取り上げた後，上から撒くという方法である。雑穀には直接使われることはない。こうして堆厩肥や下肥が効果的に使われており，常畑ではムギ作のために毎年施肥を行い，マメも植えられているので，地力の減少が防がれ，その結果他の作物の減収が防がれている。

ジャガイモをはじめとして野菜類については，自家用程度に数畝の専用場所が空けられている。3月にイモを植え，7月～8月に収穫した後，ダイコンやハクサイが植えられる。

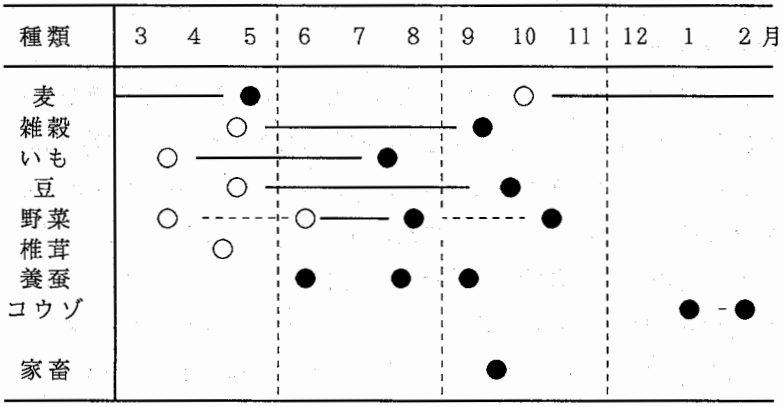
焼畑における栽培は，聴き取り調査では，第7表に示すように3年周期を基本として作物が組み合わされ，4年目には，雑草があまり茂らない等の好条件を得た場合，マメ類を栽培する。基本的には，中部地方山地焼畑の典型である，ソバ―雑穀―マメの「ナギハタ」型といえる[26]。

焼畑に関わる作業は，家族で作業可能な範囲を基本として焼き払いや作付が行われ，3軒のユイによって手伝いが行われることもあった。

第7表　焼畑輪作形態

耕作年度	初年度	2年目	3・4年目	その後
月	8月火入れ	5月播種	5月播種	10年休閑
作物	ソバ	コキビ アワ エゴマ	ダイズ アズキ エゴマ	植林 通い畑

資料）聴き取り調査



○播種・植え付け　●収穫
資料）聴き取り調査

第8図　農耕カレンダー

3．農耕活動

では，実際に人々はどれほど農耕に従事したであろうか。1年を通じて見た場合，第8図に示したように，春の雑穀の播種と，秋の麦の収穫時が農繁期となっている。さきに掲げた作物の栽培カレンダーを併せてみていくと，本地区では，農作業は3月に始まる。まずは，ジャガイモ畑の畑起こしと，イモの植え付けである。その後に様々な野菜の播種や苗作り，植え付けを行う。5月になると，生育してきたオオムギの畝の

間に，アワ・ヒエ・コキビなどの雑穀やダイズ・アズキなどの豆類の播種・植え付けを行う。そして，6月なると麦を収穫する。オオムギは根こそぎ引き抜いていく。その後にマメや雑穀類が育ち，野菜畑では，ジャガイモをはじめ様々な野菜が生育してくる。この夏から秋にかけては，間引きや土寄せ，除草作業が随時入る。10月なると雑穀の収穫時期であり，上から下へ向かって刈っていく。タカキビは穂のみを刈り，その他は，稈の下から鎌で刈っていく。それをハサに掛けて乾燥させる。収穫後に，整地し施肥を行った上でオオムギを播種する。トウモロコシを作付した場合は8月に収穫し，その後にソバを播種する。そして，ソバ収穫後に，施肥を行った上でオオムギの播種を行う。麦の播種を終えると農作業は一段落する。

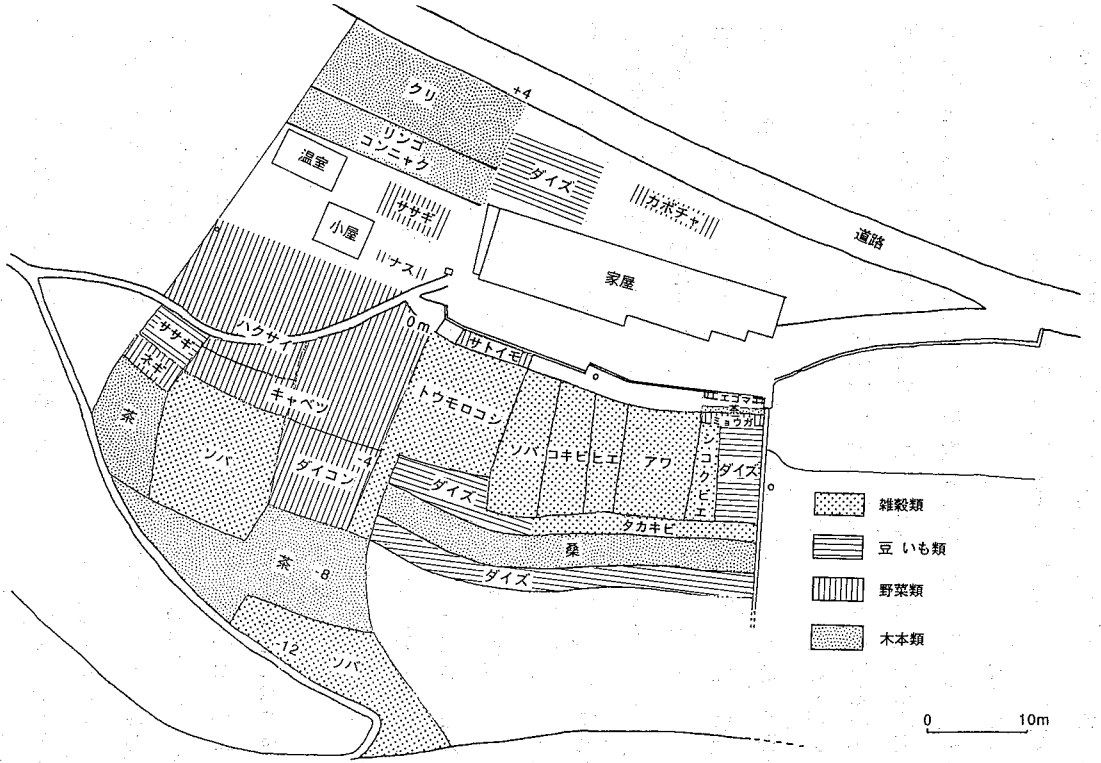
こうした農作業に費す日数を，当時の雑穀栽培に近い状況で現在も農耕を行っている人の農事日記をもとに検討してみよう。現在の常畑における夏作の状況は，第9図に示される。約3反の畑に多種の作物が小面積に作付けられ，クワは畑の端に植えられていることがわかる。このような自給的規模の耕作状況は，昭和20年代も同様であったといえる。

日記から農耕に関わる仕事を抽出したものが，第8表である。現在では，1年の内農作業に費やされるのは，3分の1にも満たないことがわかる。また，一定期間の農繁期を除けば，一日中労働に費やされることもない。また，聴き取り調査においても，栽培規模が大きいオオムギを除いた多くの自給的作物については，おのおの1日程度で収穫等の作業

第8表　労働従事日数と農作業の従事回数（1985年度）

月	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	合計
総日数	7	9	17	18	18	10	10	9	10	1	2	0	111日
農作業計	6	10	16	19	20	14	8	6	6	3	2	0	110回
うち女性作業			2	4	7	6	3	4	0	0	0	0	26回

資料）野牧家日記　　注　作業は1作業を1回と数えた



第9図　夏作の常畑（1990年）

ができたといわれる。農作業で最も多いのが野菜の手入れであり，間引きや除草に手間がとられる。除草は，4月から11月まで22回行われている。特に7月から8月にかけては野菜の草取りが一番の仕事である。雑穀の除草は，1回程度であるが，土寄せや間引きの際に，同時に除草も行っている。

一方，1年の内で女性が行う農作業をみると，わずか26回に過ぎない。自給的農業であれば，さほどの仕事量にはならず，男性主体の仕事の補助的役割の意味が大きい。逆に男性が林業などに従事していれば，代わって農作業を行えたといえる。

昭和20年代には，これらの他にオオムギ栽培に必要な，畑起こし・施肥・播種・除草・収穫作業が加わり，冬はコウゾの刈り取りや加工の仕事，コンニャク出荷も加わる。さらに焼畑や山作畑に関わる作業が加わる。おのおのの作業は1～数日であるが，作業数や耕地面積が増すので，労働は時間的にも肉体的にも現在に比べれば厳しかったことはいうまでもなかろう[27]。

ただし，焼畑では，除草は行わず，播種後は収穫直前のイノシシ退治まで特に作業は行っていなかったといわれる。

なお，農作業には作物の加工や家事労働等も考慮する必要があろう。これらに関しては，稿を改めて論じたい。

V．農耕における自然との対峙

作物栽培に直接関わる作業，とりわけ，急傾斜地である本地区では，III・IV章で述べた斜面に適応するための農耕技術が自然との対峙である。それに加えて，自然環境に囲まれた中で，さまざまな生物との関わりも見逃せない特徴である。

秋が近づくと，イノシシやシカが収穫前の成熟してきた作物を狙って畑に来るようになる。これらの動物を畑に入れないようにするための防除活動が，地区住民の大きな仕事であった。人々は，常畑のみならず，自宅から離れた通い畑や焼畑も含めた広範囲で防除活動をしなければな

らない。なおかつ，動物は夜行性のために，夜通しで畑に出かけて防除しなければなず大変な仕事であった。ラジオが普及してからは，常畑では自宅に設置し，ボリュームを上げて追い払うことができるようになった。山作畑では，柵を設けた上に，「ホーイ，ホーイ」と大声を出したり，缶を叩いたりして近寄らせないようにした。また，集落近くにはワナも設置したが，これはあまり成果が出なかったといわれる。

このように，一般には積極的に害獣退治を仕掛けるのではなく，もっぱら動物を近寄らせないようにするという防御的な方法がとられていた。また，昭和20年代には，近年と比べると，さほど獣害は深刻でなかったといわれる。その理由として，当時は猟期がさほど厳密でなかったため，イノシシなどが発見されれば，即，猟師が捕獲しており，動物もなかなか近寄って来なかったためであるといわれる。ダイズを食べるヤマバトも猟師が鉄砲で撃って退治していた。

また，作物が生育する過程では，除草と害虫の駆除も重要であろう。ダイズやソバは雑草をあまり寄せ付けず，ヒエやアワは雑草が生え易いとされるが[28]，本地区では全般的に雑草は少ないといわれる。本地区では，ハコベと，「スベラビュウ」と呼ばれるスベリヒユの2種が畑地によく生える代表的雑草である。オオムギ栽培では，3月と5月に除草活動をする。他の雑穀に対しての除草は1回程度であり，雑穀には除草は少ないということが示される。しかし，土寄せや間引きの際にも，同時に除草を行っており，その効果も大きいといえる。それに対して，野菜の除草は手間を必要とする。さきの日記に見たように，除草は特に7月から8月にかけて最も回数の多い仕事である。それでも，栽培面積が小さいために1日中除草活動を行う必要はない。また，焼畑地では除草は行わなかった。

害虫に関しては，一般に雑穀には害虫がつきにくく，また麦栽培の時期は低温のため，昆虫の活動も少ない。とりわけヒエは害虫に強いといわれる。アワなどには，アワヨトウやアワノメイガが発生することがあるが[29]，大発生には至らない。聴き取り調査では，害虫駆除を行ったとい

う話は得られなかった。代わりに，お札を立てておいたり，禰宣に頼んでお祓いをしてもらう。そうすると害虫がザザッと音を立てて逃げて行ったといわれる。駆除としては，ジャガイモにはハリガネムシと呼ばれるトビイロムナボソコメツキの幼虫が入り込むので，3月のイモ畑の耕起の際に，土の中に残っていたイモをよく注意して取り除くことが行われた。実際に深刻な被害になるほどの害虫も発生しておらず，害虫についてはあまり問題とはなっていない。

一方で，農耕活動に付随してさまざまな自然の資源を得ることもできた。まず，オオムギの草取りの時には，畑に生えているノビルを採ることができた。また，畑に生えるイヌビユも食用山菜として採られた。

そして，本地区では「カナバイ」と呼ばれるクロスズメバチが食用に重宝されている。クロスズメバチは，畑や土手などの土の中に巣を作り，夏の終わりから秋にかけて最大となる。そのため，この時期の草刈りなど農作業の際には巣を発見することができた。自分の常畑ならば，目印を付けておけば所有が認められるので，巣がまだ小さい場合には立て札を付けておけば他人に取られることはなく，十分大きくなってから取り上げることができる。また，共有林や家の近所で牛のエサや堆肥に用いる草を刈るときに発見することもある。しかし，自分の土地でない場合は，巣に対する所有権は主張できない。そこで，時期が早くて巣がまだ小さい場合にはその場で採取して自宅で飼育し，大きくなっていれば，そのまま食用に取り上げるということも行われていた。

多くの家で，ニホンミツバチを飼育してハチミツを得ていたことも注目される。春から初夏にかけて山や住居の近くに樹洞を利用した巣箱や木の巣箱をいくつも放置しておき，ハチの群が入るのを待ち，これを自宅に持ち帰って設置しておく。そして，秋にソバの花が散り，ハタラキバチの数が減った後にハチミツを搾る。

ミツバチの最大の外敵はスズメバチであり，一旦，巣が襲われると全滅してしまうので，その防御に絶えず気を配る必要がある。ミツバチの巣箱の設置場所をみると，自宅周辺あるいは常畑の周辺に置かれており，

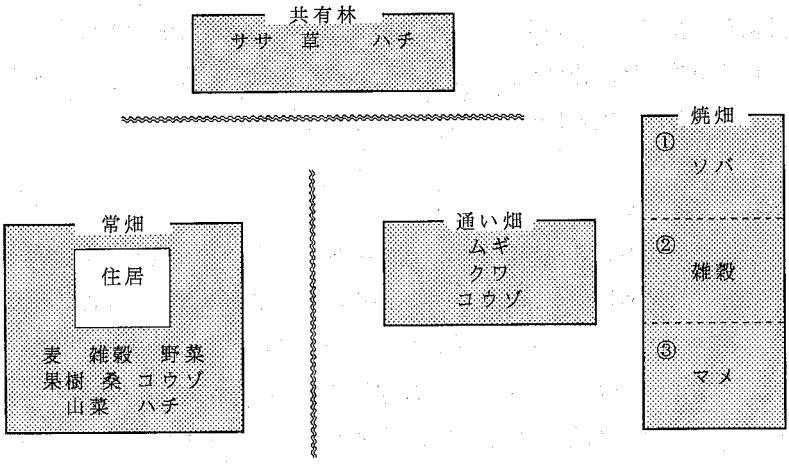
外敵から管理しやすいようになっている。なお，地区の最上部に位置する半場集落では，標高が高すぎるのでハチ箱を置いてもミツバチは入らないといわれ，実際に設営している者もいなかった。

Ⅵ．ま と め

下栗地区における農耕活動は，山村の基幹作物である雑穀を自給作物の主体として栽培する，自給的要素が強いものであった。それは，商品化されている作物があるものの，多くの作物は自家用に足りる程度の作付であることに現れている。作物の種類の点では，オオムギ・タカキビ・シコクビエは温暖地に適した作物であるが，一方でジャガイモのような冷涼地を好む作物も多く栽培され，他の雑穀のような基幹作物と併せて，温暖・冷涼の両面を備えた作物栽培の様相を呈している。また，気温差が大きいところを好む茶やコンニャクも栽培されている。これは，本地区が中部地方の山地であるにもかかわらず，冬期の積雪がほとんどなく，夏期は気温も高くなり，斜面の輻射熱も大きいという，温暖さや気温差の大きさによるものであるといえる。また，連作や輪作による減収は，傾斜地故の土壌の流出やそれに対処するための施肥，さらに麦作を主体とした輪作体系のために，さほど影響が出ない。そのための肥料・堆肥を製造するためには家畜飼育も欠かせない。

各世帯の耕地の空間は第10図に示す形で得られる。これが日常的な生活空間といえるものであり，3箇所に分かれる畑地の中で，食料生産および商品作物生産の場として常畑が基本にあり，焼畑は，自給用作物栽培を中心として，常畑の補完的な役割を果たしている。農耕に費やす時間の配分をみても，オオムギや野菜栽培が行われている常畑での活動が最も多い。しかも，常畑は自宅周辺であるために日常的な行動範囲は限定される。

そうした空間の中で，農耕活動は常に自然環境の中にある。さまざまな工夫をこらした農耕自体が，土地への最大の適応を示しているが，それに加えて，生活圏と同じくして棲息する動植物と接する機会もまた生



第10図　耕地の空間構造

じている。その中で，ハチや山菜のように，農耕に伴って，発見・採集が容易になるものがあり，食用化できるものは積極的に利用される。また，農耕を中心とする活動空間が限定されることによって，分蜂や外敵の攻撃に際して管理を要するミツバチの飼育も可能となっている。

本稿では，生活の中心となる農耕について述べてきた。この農耕活動によって得られた作物がどのように食料として用いられ価値づけられているか。さらに山村においては副食としての意味の大きいさまざまな野生動植物がどのように食糧として使われているか。こうした利用や選択の問題については稿を改めて検討したい。

謝　　辞

本研究を進めるにあたっては，野牧源吾・あゑ子夫妻をはじめとする下栗地区の方々，上村役場，南信濃村役場の方々から懇切丁寧に御教示賜った。また，市川健夫先生をはじめとする先生方および学兄諸氏からは有益な御助言を賜った。名古屋大学の愛宕誠治氏には実測調査等でたいへんお世話になった。記して厚く御礼申し上げます。

注および参考文献

1）山村研究史について，本稿では詳細にレビューする余裕がないが，民俗学では柳田国男や宮本常一らの一連の著作をはじめ，多くの民俗誌があり，近年では湯川洋司（1991）：『変貌する山村── 民俗再考 ──』日本エディタースクールに整理されている。また，地理学の立場からは，宮口伺廸（1975）：「わが国の地理学における山村研究について」早稲田大学教育学部学術研究，24．では地誌的観点から，藤田佳久（1981）：「わが国における山村研究の系譜と山村の概念」山村研究年報，2．が関連分野も含めた系譜を論じている。また，岡橋秀典（1989）：「現代日本における山村研究の課題と展望」人文地理，41－2．は，従来の研究史を踏まえ，現代日本における山村社会について，池谷（1988）：「東北地方の山村を対象とした研究の動向と東北山村史」山村研究年報，10．は山村の文化地理的研究動向を整理し，歴史的・複合的研究の必要性を述べている。

2）松山利夫（1986）：『山村の文化地理学的研究』古今書院．および佐々木高明（1988）：山民の生業と生活・その生態学的素描 ── 白山麓と秋山郷 ──．国立歴史民俗博物館研究報告，18．に集約される。

3）前掲注1）湯川（1991）をはじめ数多い。

4）宮本常一（1964）：『山に生きる人々』未来社，pp. 203－204。

5）市川健夫（1991）「日本のチロール遠山郷」地理 36－12。他に市川健夫（1987）『ブナ帯と日本人』講談社．など。

6）下栗地区を取り上げた研究は，以下の文献が上げられる。

① 信濃教育会下伊那部会編（1936）：『下伊那の地誌遠山地方』山村書院。

② 筒井泰蔵（1974）：「遠山谷の変貌」伊那 1974 年 4～6。

③ 上村民俗誌刊行会（1977）：『南信州・上村　遠山の民俗』上村，上村民俗誌刊行会。

④ 三浦宏（1988）：「赤石構造谷および南部高地山村の変貌」『伊那谷山村の変貌』信濃教育会出版部。

⑤ 平沢清人（1988）：『伊那谷の山村生活史』郷土出版社

⑥ 八田二三一（1988）：『長野県遠山郷における伝統作物の栽培』東京学芸大学臨地研究。

⑦ 八田二三一（1989）：「長野県遠山郷における山地斜面の呼称に関する一考察」日本地理学会予稿集，35。

7）聴き取りでお世話になった主な方々は次のとおりである。
野牧源喜氏（半場），野牧あゑ子氏（半場），野牧徳人氏（軒松）
熊谷好文氏（本村），熊谷輝雄氏（本村），胡桃沢友明氏（南）
仲井久米義氏（帯山）

8）野本寛一（1987）：『生態民俗学序説』白水社，p. 222。

9）前掲注7）① p. 61。

10）方言を例にとっても，下栗と静岡県側が一致し，上村をはじめ遠山郷他地区とは

異なっている語がいくつか存在する。

11) 池戸昭夫・坂本正夫（1978）：上村下栗地域の地質。下伊那教育会自然研究紀要・地質編Ⅰ。山村が地すべり地帯に立地することに関しては松山（1986）などに述べられている。地すべりによって得られた土には客土をした効果があるともいわれる。

12) 前掲注6）文献③ p. 447。

13) 半場在住野牧源吾氏の観測記録による。

14) 前掲注6）文献① pp. 43－44。

15) 当時，農業事務所勤務の日給が75円であったのに対して，山師は500円であった。また，猟師の場合も，クマの胆などが高価に取り引きされたため，冬の仕事のみであとは遊んで暮せたといわれる。

16) 離村世帯は，現在の名古屋市，瀬戸市，および静岡県浜松市に計9世帯，家を下栗に残しての就業は8世帯あった。

17) 本谷川の谷底に若干の田と上村内に出作り地があった。前掲注6）文献① p. 49には，下栗で1町歩の水田が作られていることが記されている。

18) 千葉徳爾（1950）：「タテザクとヨコザク ── 畝立て農法の問題 ──」民間伝承14－8。および同（1953）：「傾斜耕地の畝方向について」地理学評論，26－5。（いずれも千葉徳爾著作選集②『民俗学と風土論』東京堂出版，1988．所収），および，前掲注6）文献④ p. 157。

19) 前掲注6）文献③ p. 124。

20) 前掲注6）文献③ p. 127。

21) 半場在住の野牧源吾氏による。

22) 前掲注6）文献③ pp. 149－150。

23) 前掲注6）文献③ p. 138。

24) 農文協編（1981）『畑作全書雑穀編』p. 778。特にヒエ稗は高カルシウムである。

25) 農文協編（1981）『畑作全書ムギ類編』p. 63。

26) 佐々木高明（1972）：『日本の焼畑』古今書院，p. 129－130。

27) 本稿では，詳細な分析ができなかったが，焼畑に関して民俗生態学的視点から福井勝義（1983）：「焼畑農耕の普遍性と進化 ── 民俗生態学的視点から ──」『山尾と海人』小学館，pp 235－274．岡惠介（1989）：「北上山地岩泉地方の焼畑の類型・分布・労働量の比較」岩手の民俗，8・9．等で労働生産性に基づく焼畑経営の特性が論じられている。

28) 前掲注24）p. 63。雑草の生えやすい不清潔作物の代表である。

29) 前掲注24）p. 800。